

## 今思えばそれは職業奉仕

「ドネーション・ミュージック」という言葉がある。昔からこの活動があるが、私は最近知った言葉だ。私が高校生の頃には、アフリカの貧困支援の為にあったチャリティーコンサート「LIVE AID」（伝説のバンド、“クイーン”の故フレディ・マーキュリーの伝記映画のラストシーンのコンサート）や、チャリティー・ソングの金字塔、USA フォー・アフリカの旗の下、飢餓を救うための楽曲、故マイケル・ジャクソンとライオネル・リッチーの共作、クインシー・ジョーンズ、プロデュースの「We are the world」等がある。当時、訳も分からず聞いていたが、今、その歌詞の一文を見ると感動する。「我々に今、正しい行いをする時がやってきた。世界が一つになって協力する時。私達自身が地球なのだ。私達は皆、地球の子供なのだ。そしてこの地球をまた輝かせるのは私達自身なのだ。だから“与えることから始めよう”・・・与える事から始めよう、まさに Rotary の行動哲学だ。

もう少し前の話になると、ABBA の「チキチータ」という曲がある。40年以上に亘って数百万枚のセールスがある。メンバーには一銭も入らず、ABBA はこの曲の収益を全てユニセフに寄付をしている。ユニセフの「子どもの年」の為に書かれた「チキチータ」（スペイン語で「小さな子」という意味）は、ラテンアメリカで大成功を収めた。メンバーのウルヴァースによると、グループは当初から印税の使途を明確にしていたそうだ。「私は、この地球上で最も緊急にすべきことは、若い女性や少女たちのエンパワーメント（一人ひとりが本来持っている力を発揮し、自らの意思決定により自発的に行動できるようにすること）だと思っている。そうすれば、世界は変わるでしょう」、「世界には、女の子に平等な機会を与えない文化や宗教がある事は、とても悲しい事。だから、私たちは早くからユニセフに、私達の資金をそこに使って欲しいと言ってきたのだ」と。

英 BBC によると、発売から43年間、「チキチータ」の印税は、極度の貧困やマチズモ（男尊女卑）の文化、家庭内暴力やレイプ、さらには社会から疎外された先住民のコミュニティにおけるアルコール依存症など、中米で起きている最も複雑な問題の解決に使われている。また、中米グアテマラの最貧困地域に住む数多くの「チキチータ（小さな子）」が、彼らの母国語で有意義なサポートを受けられる様にする為にも使われている。

ウルヴァースは、「この曲を作った時にこれ程までに永続的なレガシーになると予想していたかどうか？」と聞かれ、こう答えている。「そんな事は考えてもいなかった」と彼は笑い、「まあ、ヒットして、沢山演奏されれば良いとは思っていただろうけど。こんなに長く続いて、こんなにお金が入るとは夢にも思っていなかった。誰もが望む最高のレガシーだ」と付け加えている。

最後に紹介するのはこの曲。前奏だけでもわかるあの曲の心温まる本当の物語。私は、曲のリリースから40年も経ってこの裏話を初めて知った。冬になると必ず流れるその歌、世界中で数十億回再生された最も有名なクリスマスメロディー。故ジョージ・マイケルが作った Wham! の曲「ラスト・クリスマス」。でも殆どの人が知らない物語がある。1984年、ジョージ・マイケルはこの曲を発表しこの

歌で得た全ての収益を寄付すると約束をしていた。理由は「お金を稼ぐ時、良心を失わない為に」。そうして始まった寄付は今も40年も続いている。彼、ジョージ・マイケルは2016年12月25日、まさにクリスマスの日はこの世を去った。しかし、彼の家族とファンはその意思を受け継ぎ、今も寄付を続けている…。この歌の歌詞は別れの歌であった。しかし別れの歌では無く、40年続く約束の歌なのである。今も世界を温かくしている奇跡のメロディ。

かように、それぞれが（故ジョージ・マイケルが楽曲の寄付の理由として「道徳的な水準」を高めることを挙げた）天職と思われる職業上のスキルを活かし、世の為、他人の為に尽し、しっかりと稼いでいく事は、Rotarianの行動哲学が目指すところだと思う。

フレディ・マーキュリーもマイケル・ジャクソンも、ジョージ・マイケルも、みんな死んでしまった。でも、今もその功績や名前は皆の心に残っている。